

研究主題

自尊感情や自己肯定感に関する調査研究（1年次）

一 各校種における授業モデルの開発を目指して 一

目 次

第 1	研究の概要	36
第 2	研究の背景とねらい	37
第 3	研究の方法	40
第 4	研究の内容	
1	基礎研究	40
2	調査研究	41
(1)	調査概要	41
(2)	全体の調査結果	42
(3)	小学校の調査結果	42
(4)	中学校の調査結果	43
(5)	高等学校の調査結果	43
3	開発研究	44
4	実践事例	
(1)	「学習内容」で高める授業モデル【小学校 特別の教科 道徳】	46
(2)	「指導方法」で高める授業モデル【中学校 数学】	50
(3)	「指導方法」で高める授業モデル【高等学校 国語総合】	54
(4)	「学習内容」で高める授業モデル【特別支援学校 職業・家庭】	58
第 5	研究の成果と今後の取組	
1	研究の成果	62
2	今後の取組	62

＜研究の成果と活用＞

1 研究の成果

- 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」に基づく調査の実施を通して、前回調査より自尊感情が高まったことを明らかにした。
- 自尊感情や自己肯定感を高めるための「授業モデル」を開発し、各校種において提案することができた。

2 研究成果の活用

- 自尊感情や自己肯定感を高めるための「授業モデル」を活用することで、授業改善に役立てることができる。

第1 研究の概要

<p>【社会状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 情報化、グローバル化 <p>【東京都教育ビジョン（第4次）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 基本的な方針5 豊かな心を育て、生命や人権を尊重する態度を育む教育 	<p>【児童・生徒の実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「自分のことが好きである」の質問に否定的な回答の割合（平成20年度） <ul style="list-style-type: none"> ・小学校第6学年 41% ・中学校第3学年 52% ○ 自己肯定感を構成する要因のうち「自己評価・自己受容」が、小学校6学年から中学校第2学年において大きく低下する。（平成21年度）
---	--

↓

【育てたい児童・生徒像】

他者とのかかわり合いを通して、自分をかけがえのない、価値ある存在として捉え、自分のよさを肯定的に認めることができる児童・生徒

↓

【研究主題】

自尊感情や自己肯定感に関する調査研究（1年次）
 - 各校種における授業モデルの開発を目指して -

【主題設定の理由】

- 東京都教職員研修センターでは、平成20年度から平成24年度までの5年間、東京都の児童・生徒の自尊感情や自己肯定感の実態把握のために、「自尊感情や自己肯定感に関する研究」に取り組んだ。同研究については、その後、全国から活用に関する問合せがあるとともに、都教委訪問モデルプランなどで学校から研修の要請もある。各学校において、本研究の成果を生かした取組を行うことにより、児童・生徒の自尊感情は高まっていると考えられるが、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める教育の更なる充実を図るために、再度、実態把握及び授業モデルの開発を行う必要がある。
- 本研究は、過去の自尊感情や自己肯定感に関する調査と同項目による調査を実施し比較することで、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感が高まっているかどうかを明らかにするとともに、調査結果を基に、各校種における授業モデルを開発することをねらいとする。

【研究仮説】

児童・生徒の発達の段階に応じた自尊感情や自己肯定感の傾向を把握し、各校種における授業モデルを開発することで、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高めることができるであろう。

<p>1 基礎研究（4月～8月）</p> <p>先行研究の調査・分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自尊感情や自己肯定感に関する研究」（平成20年度～平成24年度） ・他道府県における施策 ・国や東京都の施策 ・国際調査 	<p>2 調査研究（9月～11月）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="font-size: small;">対象校種</th> <th style="font-size: small;">対象校数(校)</th> <th style="font-size: small;">対象児童・生徒数(名)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>小学校</td> <td>66</td> <td>4,126</td> </tr> <tr> <td>中学校</td> <td>52</td> <td>5,332</td> </tr> <tr> <td>高等学校</td> <td>23</td> <td>3,082</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>141</td> <td>12,540</td> </tr> </tbody> </table> <p>3 開発研究（9月～11月）</p> <p>各校種における授業モデルの開発</p>	対象校種	対象校数(校)	対象児童・生徒数(名)	小学校	66	4,126	中学校	52	5,332	高等学校	23	3,082	計	141	12,540	<p>4 検証授業（10月～11月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭島市立成隣小学校 ・葛飾区立青戸中学校 ・都立稔ヶ丘高等学校 ・都立臨海青海特別支援学校 <p>5 まとめ（11月～1月）</p> <p>児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める「授業モデル」の作成</p>
対象校種	対象校数(校)	対象児童・生徒数(名)															
小学校	66	4,126															
中学校	52	5,332															
高等学校	23	3,082															
計	141	12,540															

第2 研究の背景とねらい

1 研究の背景

東京都教職員研修センターでは、平成20年度から平成24年度までの5年間、「自尊感情や自己肯定感に関する研究」に取り組んだ。その背景として、主に以下の4点が挙げられる。

第1に、情報化、核家族化、少子化等の社会変化に伴い、児童・生徒の「生きる力」を育むことが重要な使命になっていたことである。

第2に、平成19年4月の「高校生の意欲に関する調査－日本・アメリカ・中国・韓国の比較－」等の国際的な意識調査の結果から、諸外国と比べて、自己に対して肯定的な回答をする日本の子供の割合が低いことが明らかになったことである。

第3に、平成19年度に実施した「全国学力・学習状況調査」では、「自分には、よいところがあると思いますか」という問いに、東京都の小学校第6学年で29.4%、中学校第3学年で39.6%が否定的な回答をしており、東京都の子供の自尊感情や自己肯定感は低いことが明らかになったことである。

第4に、平成20年5月の「東京都教育ビジョン（第2次）」では、「人間関係を築く力の育成」等を示しており、子供一人一人が自己に自信をもち、新たなことや困難なことにも挑戦しようとする意欲を高める教育を推進する必要があることである。

(1) 平成20年度（1年次）の研究

平成20年度（1年次）の研究では、児童・生徒の自尊感情の傾向や自己評価に対する教員の捉え方の状況等を調査した。具体的には、心理学者のローゼンバーグの自尊感情尺度等を基に18の質問項目を設定し、東京都の児童・生徒12,740名（小学校4,030名、中学校2,855名、高等学校5,855名）と教員710名を対象に質問紙法により調査を行った。その結果、自分を肯定的に評価する感情が、小学校第1学年から中学校第1学年まで次第に下がり、中学校第3学年にかけて上がるが、高等学校で再び低くなる傾向があることが分かった。

また、児童・生徒の自尊感情を高めるための指導上の5観点（「自分への気付き」、「自分の役割」、「自分の個性と多様な価値観」、「他者とのかかわりと感謝」、「自分の可能性」）を設定し、各観点について2～3項目の配慮事項を示した。

さらに、「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点（試案）」を作成し、各教科・領域等において、児童・生徒の発達の段階に応じて自尊感情や自己肯定感を高めることができるようにした。

(2) 平成21年度（2年次）の研究

平成21年度（2年次）の研究では、指導・援助の効果及び有効性を引き続き検証するために、まず、学校教育において捉え方がまちまちであった自尊感情と自己肯定感について、以下のよう

「自尊感情」

「自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」

「自己肯定感」

「自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」

また、児童・生徒の自尊感情の傾向を把握するために、「A 自己評価」、「B 自己受容」、「C 関係の中での自己」、「D 将来展望や自己決定」、「E 精神的強さ・落ち着き」の5観点32項目の質問項目からなる「自己評価シート」を開発するとともに、平成20年度に作成した「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を見直し、効果的な授業を行うための資料を作成した。

さらに、自尊感情を測定する新たな尺度等を開発するために、慶應義塾大学と共同して、小学校第5学年から高等学校第3学年までの児童・生徒を対象に質問紙法で調査を実施し、4,019名（小学校1,311名、中学校1,144名、高等学校1,564名）から有効回答を得た。同調査の結果から、自尊感情のうち特に「自己受容・自己評価」については、小学校第6学年から中学校第1学年にかけて低下傾向が大きいことや、中学校第2学年及び高等学校第2学年で低下することが分かった。

(3) 平成22年度（3年次）の研究

平成22年度（3年次）の研究では、自己評価シートや作成した指導上の留意点を更に活用するために、主に以下の3点について研究を進めた。

ア 自尊感情を構成する3観点の整理

自尊感情を構成する観点について、因子分析を行い、平成21年度の5観点から、「A 自己評価・自己受容」、「B 関係の中での自己」、「C 自己主張・自己決定」の3観点到整理した。（図1）

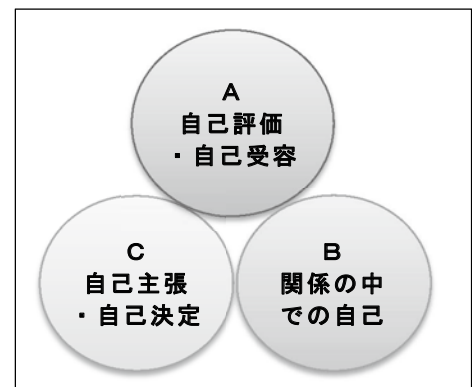


図1 自尊感情を構成する3観点

イ 「自尊感情測定尺度（東京都版）」の開発

自尊感情を構成する3因子に基づき、3観点22項目の質問項目からなる自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を開発した。（図2）

具体的には、「A 自己評価・自己受容」に関する8項目、「B 関係の中での自己」に関する7項目、「C 自己主張・自己決定」に関する7項目の計22項目を記入することで、児童・生徒が自己をどのように捉えているかを把握できるようにした。

また、同測定尺度によって把握した結果を数値化し、レーダーチャート化して、自尊感情の傾向を示すことができるようにした。（図3）

【自尊感情測定尺度（東京都版）】

質問に対して、自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。
 「あてはまる」場合は4、「どちらかといえばあてはまる」場合は3、「どちらかというにあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を○でかこんでください。

<記入例>

例) 冬よりも秋が好きである

あてはまる どちらかというにあてはまる どちらかというにあてはまらない あてはまらない

.....4-----3-----2-----1

.....4-----3-----2-----1

.....4-----3-----2-----1

.....4-----3-----2-----1

No	項目	4	3	2	1
1	私は今の自分に満足している
2	人の意見を素直に聞くことができる
3	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる
4	私は自分のことが好きである

図2 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（一部）

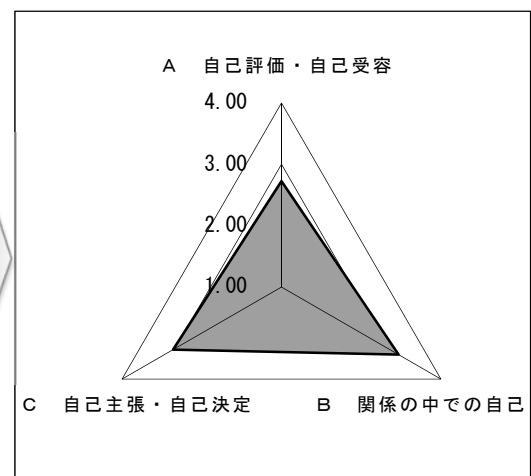


図3 自尊感情のレーダーチャート

ウ 「自尊感情や自己肯定感を高める指導上の留意点」の改訂

平成21年度に開発した指導上の留意点を改訂し、自尊感情を構成する3因子に基づき、「Ⅰ期【幼児期】（4歳～5歳）」、「Ⅱ期【児童期前期】（6歳～10歳）」、「Ⅲ期【児童期後期～思春期前期】（11～14歳）」、「Ⅳ期【思春期後期～青年期前期】（15歳～18歳）」の発達の段階からなる「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を作成した。（表1）

表1 自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点（一部抜粋）

3つの観点			小観点	Ⅰ期【幼児期】（4歳～5歳）	Ⅱ期【児童期前期】（6歳～10歳）
				就学前教育	小学校第1学年～小学校第4学年
A 自己評価・自己受容	<input type="checkbox"/> 自己への満足感（1） <input type="checkbox"/> 自己愛（4、13） <input type="checkbox"/> 自己の価値（7、10、16、22） <input type="checkbox"/> 自己の存在感（19）	自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができるようになります。	① 成果の発揮	自分で考えたことやできるようになったことを発揮できる場を設定するようにします。	得意なことや頑張ったことの成果を発揮できる場を設定するようにします。
			② 相互理解	互いのアイデアを取り入れ、認め合えるようにします。	互いの得意なことや好きなことを認め合えるようにします。
			③ 努力の評価	自分の思いで取り組んだり、挑戦したりしていることを認めるようにします。	新しくできるようになったり、繰り返し努力して取り組んだりしたことを認めるようにします。
			④ よさの気付き	自分の得意なことや一人でできるようになったことに気付くことができますようにします。	自分の長所や繰り返し努力してできるようになったことに気付くようにします。

※詳細については、平成24年3月 東京都教職員研修センター「平成23年度 子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料 自信 やる気 確かな自我を育てるために【発展編】」P88、P89参照

(4) 平成23年度（4年次）の研究

平成23年度（4年次）の研究では、自己評価を行うことが難しい児童・生徒の自尊感情の傾向を把握することができるように、「他者評価シート」を開発した。具体的には、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感に関わると考えられる行動等を、各教科等の場面に応じて観察・記録し、6観点24項目にまとめた。

また、研究協力校において、全体計画や年間指導計画を作成して、学校の推進体制を整備するとともに、各教科等の指導において、「学習内容」で高める（例：自己を振り返る学習、自己の個性を発見する学習、生命の尊さを考える学習など）、「指導方法」で高める（例：友達と関わりながら学ぶ学習方法の工夫、主体的に取り組める教材・教具の工夫など）という視点から自尊感情や自己肯定感を高める工夫を行った。

(5) 平成24年度（5年次）の研究

平成24年度（5年次）の研究では、これまでの研究成果の普及・啓発を図るために、研究推進校を6校、園を1園指定し、研究推進校・園において教員だけでなく保護者、地域を対象とする研究授業や発表会を実施した。

また、「夏季集中講座」や「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育フォーラム」等を開催し、研究の成果を広く発信した。

2 研究のねらい

以上の経緯を踏まえ、現在、自尊感情や自己肯定感については、学校経営方針（計画）の一つとして掲げたり校内研究のテーマとして活用したりしている学校がある。また、本研究成果を生かした「都教委訪問モデルプラン」を活用し、研修を実施したいという学校からの要請もある。さらに、全国から研究成果の活用に関する問合せがある。

このように、本研究成果を生かした学校での取組の積み重ねにより、東京都の児童・生徒の自尊感情や自己肯定感は着実に高まっているものと考えられる。しかし、前回調査から10年以上経過しており、その検証を明確にするため、今年度、前回と同規模の調査を実施し、現在の東京都の児童・生徒の自尊感情の傾向を改めて把握する。また、調査結果を基に、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を活用した自尊感情や自己肯定感を高めるための授業モデルを開発し、具体的な方策を考証する。

以上のことから、本研究のねらいを、次の2点とした。

- (1) 平成21年度に実施した自尊感情や自己肯定感に関する調査と同項目の調査を実施し、児童・生徒の自尊感情の傾向を把握する。
- (2) 調査結果等を基に、自尊感情や自己肯定感を高めるための授業モデルを開発する。

第3 研究の方法

本研究の研究方法は、以下の2点である。

- (1) 都内公立小学校、中学校、高等学校の児童・生徒約1万名を対象に、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を活用した調査を行い、現在の児童・生徒の自尊感情の傾向を把握する。
- (2) 研究協力校4校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）において授業研究を行い、自尊感情や自己肯定感を高めるための授業モデルを開発する。

第4 研究の内容

1 基礎研究

基礎研究として、自己肯定感や自尊感情に関する現状や施策等に関連する文献等の資料を確認した。

(1) 令和元年度「子供・若者白書」

子供たちの自尊感情や自己肯定感の現状については、「子供・若者白書」（令和元年度・内閣府）によると、「自分自身に満足している」という問いに、否定的な回答をしている日本の子供の割合は55.0%（「どちらかといえばそう思わない」が30.8%、「そう思わない」が24.2%）であった。韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンなどの諸外国の子供と比較すると否定的な回答の割合が高かった。（図4）

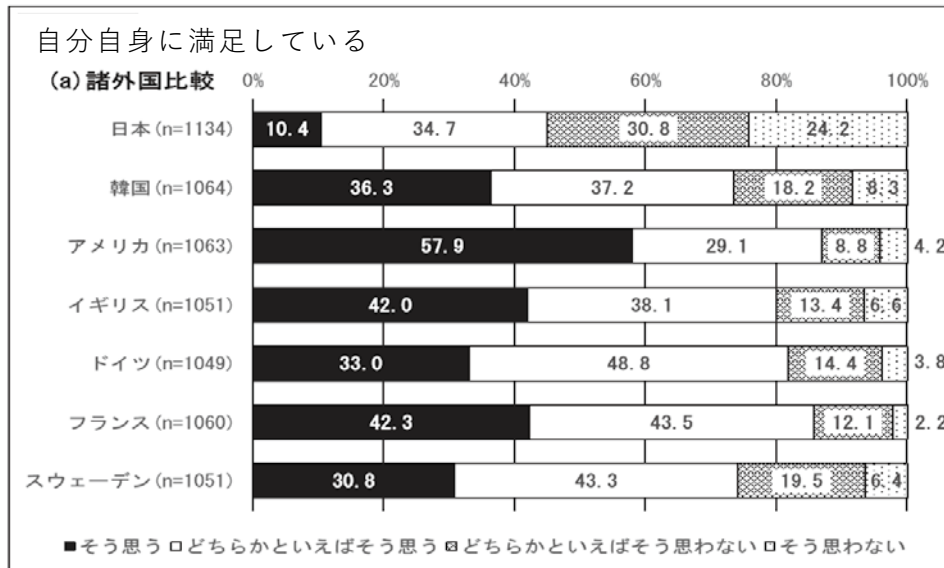


図4 「自分自身に満足している」の問いの諸外国比較 ※令和元年度「子供・若者白書」P4

(2) 「全国学力・学習状況調査」の結果

令和元年度に実施した「全国学力・学習状況調査」の結果では、「自分には、よいところがあると思いますか」の問いに、小学校第6学年で 18.6%（「どちらかといえば、当てはまらない」13.2%、「当てはまらない」5.4%）、中学校第3学年で 25.9%（「どちらかといえば、当てはまらない」18.0%、「当てはまらない」7.9%）が否定的な回答をした。この割合は、東京都が「全国学力・学習状況調査」を開始した平成19年度以降、徐々に低下しているものの、依然として自分に自信をもてない児童・生徒が一定数存在していることが明らかとなった。（図5）

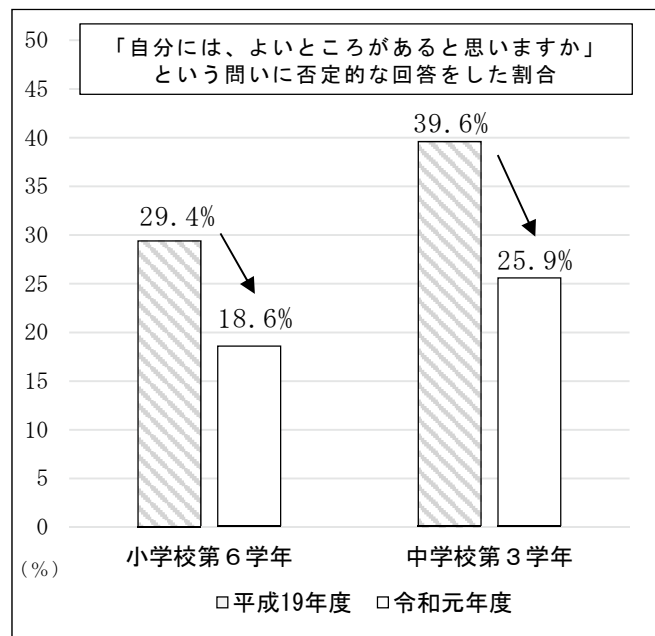


図5 平成19年度と令和元年度比較 ※「全国学力・学習状況調査」の結果を基に作成

2 調査研究

(1) 調査概要

ア	調査目的	(ア) 都内公立小・中学校及び高等学校に在籍する児童・生徒の自尊感情に関する実態を把握する。 (イ) 本調査の集計結果について、平成21年度に実施した前回調査（児童・生徒4,019名）と比較・分析する。
イ	調査内容	「自尊感情測定尺度（東京都版）」3観点22項目
ウ	調査方法	質問紙法（無記名）
エ	調査時期	令和2年7月から令和2年9月まで
オ	調査対象	都内公立学校141校（小学校66校、中学校52校、高等学校23校） 児童・生徒12,540名（小学校4,126名、中学校5,332名、高等学校3,082名）

※なお、本調査の回答を集計するに当たっては、都立青峰学園に協力を依頼した。

(2) 全体の調査結果（図6）

平成21年度の前回調査と比較すると、全体的な傾向として、次の4点が分かった。

- ア 小学校第6学年における「C 自己主張・自己決定」の数値が若干低下しているものの、全ての校種・学年において、自尊感情を構成する3観点ほぼ全ての数値が上昇した。
- イ 小学校第6学年から中学校第2学年、高等学校第1学年から第2学年における「A 自己評価・自己受容」の数値の変化が緩やかになった。
- ウ 全ての校種において、3観点のうち「B 関係の中での自己」の数値が最も上昇した。
- エ 全ての校種において、3観点のうち「A 自己評価・自己受容」の数値が低かった。

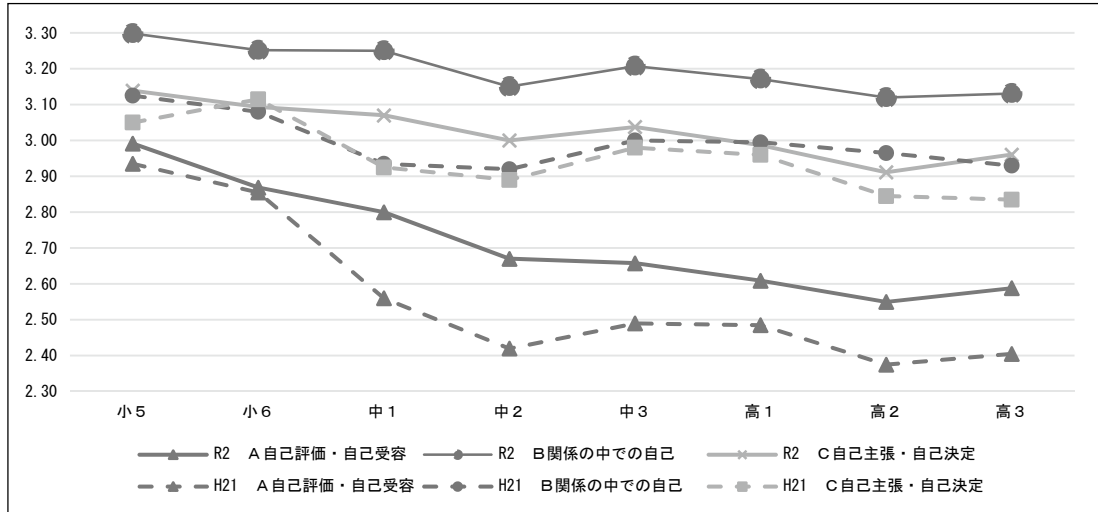


図6 全体の調査結果（令和2年度：N=12,540 平成21年度：N=4,019）

(3) 小学校の調査結果（図7）

都内公立小学校66校に在籍する第5学年から第6学年までの児童4,126名の調査結果である。第6学年の「C 自己主張・自己決定」の数値が、前回調査の3.12から0.03低下して3.09となり若干低下しているものの、他の数値については全て上昇した。

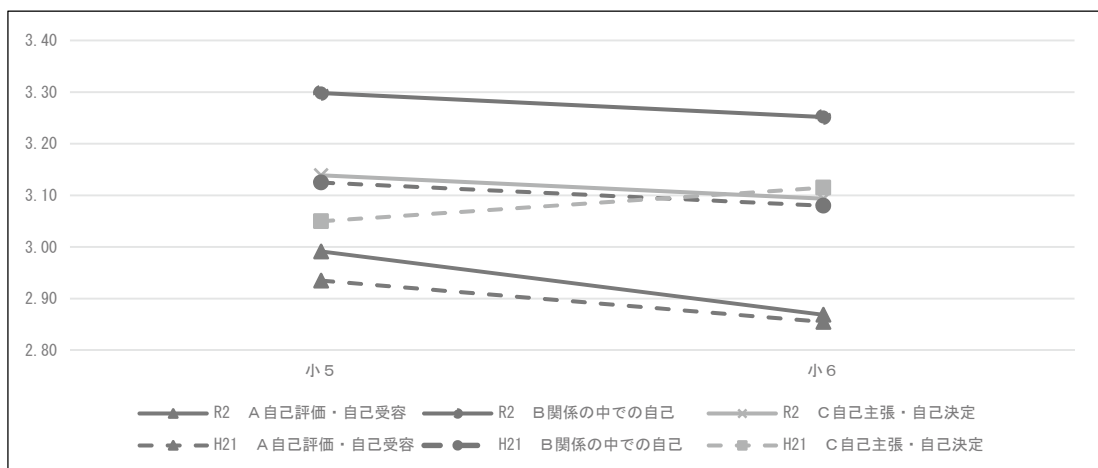


図7 小学校第5学年から第6学年までの自尊感情の傾向
(令和2年度：N=4,126 平成21年度：N=1,311)

(4) 中学校の調査結果（図8）

都内公立中学校52校に在籍する第1学年から第3学年までの生徒5,332名の調査結果である。平成21年度の調査結果と比較すると、自尊感情の3観点について、全ての数値が上昇した。特に、第1学年の「B 関係の中での自己」の数値は、前回調査の2.94から0.31上昇して3.25となり、中学校の調査結果において最も上昇した。

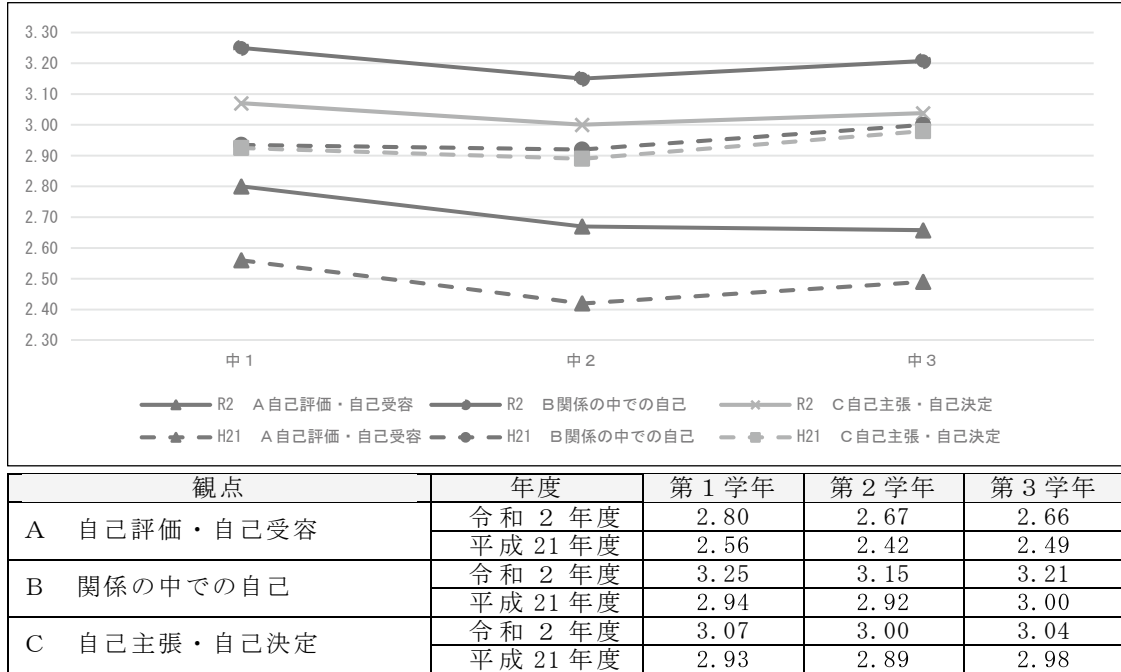


図8 中学校第1学年から第3学年までの自尊感情の傾向
(令和2年度：N=5,332 平成21年度：N=1,144)

(5) 高等学校の調査結果（図9）

都立高等学校23校に在籍する第1学年から第3学年までの生徒3,082名の調査結果である。平成21年度の調査結果と比較すると、中学校同様、全ての数値が上昇した。特に、第3学年の「B 関係の中での自己」の数値は、前回調査の2.93から0.2上昇して3.13となり、高等学校の調査結果において最も上昇した。

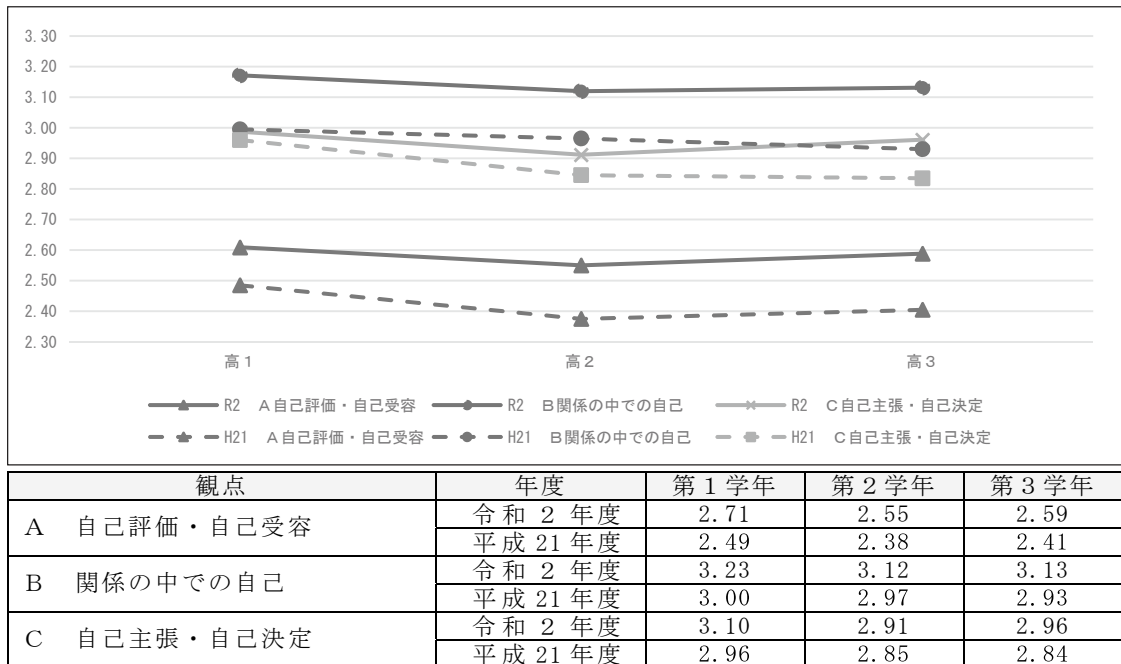


図9 高等学校第1学年から第3学年までの自尊感情の傾向
(令和2年度：N=3,082 平成21年度：N=1,564)

3 開発研究

(1) 自尊感情や自己肯定感を高める授業モデルの開発

調査結果等を踏まえ、本研究では、東京都教職員研修センターの先行研究で明らかにした自尊感情や自己肯定感を高める二つの視点である、「学習内容」で高める視点、「指導方法」で高める視点を活用し、各校種・各教科等における授業モデルを開発した。

ア 「学習内容」で高める授業モデル

各教科等では、自尊感情や自己肯定感を直接取り上げていて、関連の深い学習内容がある。この学習内容を充実させることが、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる。例えば、「自己の個性を発見する学習」では、友達が見つけた自分のよさを知り、自分らしさを伸ばそうとする態度を育てることにつながる。また、「成就感や達成感を味わえる学習」では、自分の考えを友達や教員に認められたり、褒められたりすることで、自信や意欲につながる。

そこで、今年度の研究では、小学校「特別の教科 道徳」、特別支援学校「職業・家庭」において授業モデルを開発し、検証授業を実施した。

イ 「指導方法」で高める授業モデル

当センターの先行研究では、学校教育においては、子供一人一人のよさを生かし、自分を価値ある存在として認められるよう、「褒める・認める」、「よさを見付ける」、「励ます」、「可能性を広げる」、「かかわる」といった視点で指導に当たることが重要であると述べている。

また、学習を通して、「できた」、「分かった」という実感をもったり、教員や友達に「褒めてもらった」、「認めてもらった」、「友達に教えることができた」等、他人とかわりながら学ぶことのよさを感じたりすることは、子供たちの自尊感情や自己肯定感を高めることにつながると述べている。

一方、こうした学習活動を行うためには、指導方法を工夫することが重要である。例えば、「学習形態や学習方法の工夫」、「教材・教具の工夫」、「評価の工夫」、「体験活動の工夫」、「課題探究型の学習や体験学習の工夫」等がある。

そこで、今年度の研究では、特に「学習形態や学習方法の工夫」に着目し、中学校「数学」、高等学校「国語総合」において授業モデルを開発し、検証授業を実施した。

(2) 授業モデルの開発

本研究では、以下の二つのステップで一人一人の傾向及び指導の方向性について着目し、各校種・各教科等の授業モデルを開発した。

ア 【ステップ1】児童・生徒の自尊感情の傾向を把握

自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を実施し、児童・生徒の自尊感情の傾向を把握する。具体的には、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の結果から、レーダーチャート全体の「形」や「大きさ」に着目し、以下のように児童・生徒の自尊感情の傾向を把握する。（表2）

表2 児童・生徒の自尊感情の傾向

タイプ	自尊感情の傾向
Iタイプ	「A 自己評価・自己受容」が高い
IIタイプ	「B 関係の中での自己」が高い
IIIタイプ	「C 自己主張・自己決定」が高い
IVタイプ	「A 自己評価・自己受容」が低い
Vタイプ	「B 関係の中での自己」が低い
VIタイプ	「C 自己主張・自己決定」が低い
全観点が高い場合	全観点が高い
全観点が低い場合	全観点が低い

※詳細については、平成23年3月 東京都教職員研修センター「平成22年度 子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料 自信 やる気 確かな自我を育てるために【基礎編】」P13～P15 参照

イ 【ステップ2】指導の方向性の検討

【ステップ1】で把握した児童・生徒の自尊感情の傾向から、指導の方向性について検討する。

(例) VIタイプ 「C 自己主張・自己決定」が低い傾向にある児童・生徒の例

例えば、VIタイプの「C 自己主張・自己決定」が低い児童・生徒の場合、【ステップ1】で「集団での活動に協力的な傾向が見られる。」「自分の判断・行動に不安がある。」等の自尊感情の傾向を把握する。

そして、【ステップ2】で「他者との比較ではなく、自分なりの目標の達成を目指すように支援する。」「自分の判断や自分で決定することに自信をもたせ、好きなこと得意なことを見付けて、打ち込めるようにさせる。」等の指導の方向性を検討する。（図10）

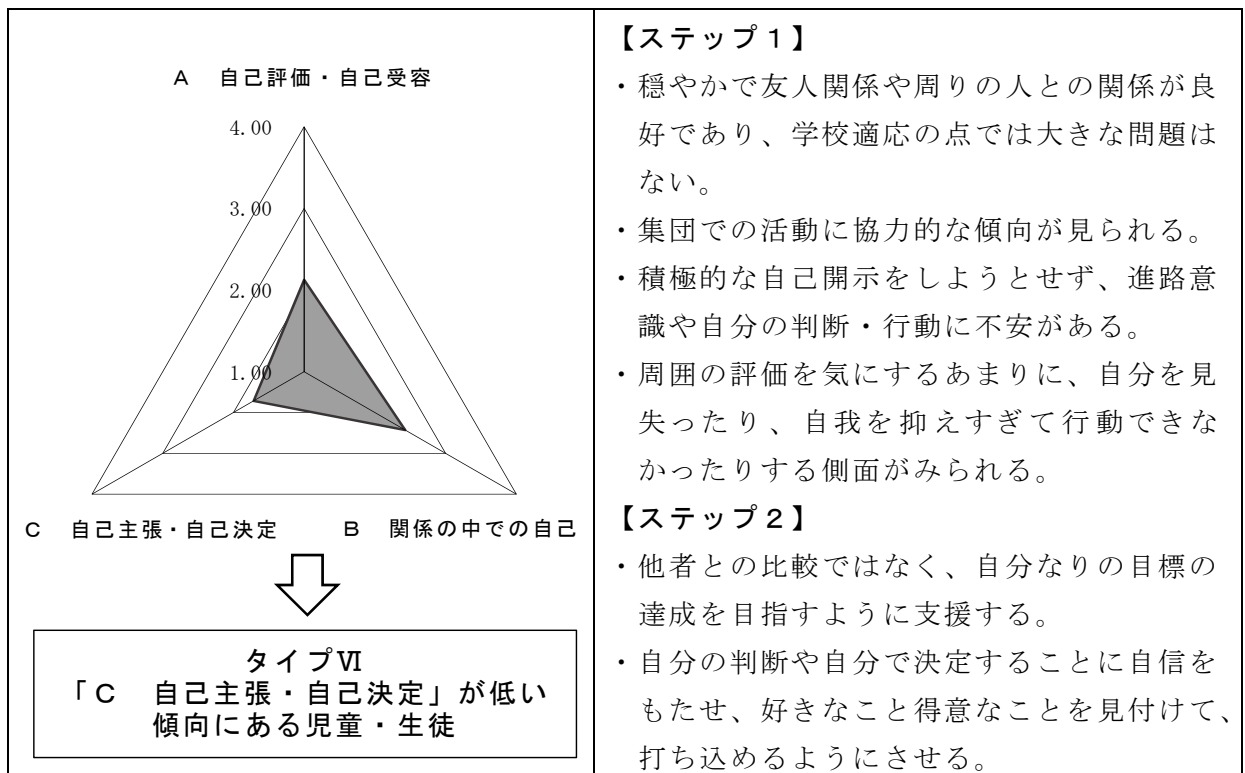


図10 「C 自己主張・自己決定」が低い傾向にある児童・生徒（VIタイプ）の指導の方向性

※平成23年3月 東京都教職員研修センター「平成22年度 子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料 自信 やる気 確かな自我を育てるために【基礎編】」P15

4 実践事例

(1) 「学習内容」で高める授業モデル【小学校 特別の教科 道徳】

第4学年 特別の教科 道徳

ア 主題名 「自分のよさを伸ばそう」（A 個性の伸長）

イ ねらいと教材

ねらい 自分の特徴に気付き、よいところを伸ばそうとする態度を育てる。

教材名 「うれしく思えた日から」（文部科学省『小学校道徳読み物資料集』P40～P43）

「自分のよいところをのばそう」（東京都教育委員会『心しなやかに』P87）

ウ 主題設定の理由

(ア) ねらいとする価値（価値観）

人は、一人一人に特徴があり、同じ人はおらず皆違っている。よって、長所にも短所にも気付き、自分の特徴を多面的に捉える必要がある。長所と思われるところは伸ばし続けると別の長所が生まれてくる。また、短所と思い込んでいたこともいつの間にか引き上げられ、長所にも変わることもある。このことにより、自己肯定感を高めることができ、さらに自己を高めようとする意欲が湧いてくる。自分の特徴を知り、自分のよさを伸ばしていくことは、人間が生き生きと自分らしく生きていく上で大切なことである。

しかし、自分の特徴を受け入れ、よさを伸ばしていくことは容易なことではない。自分のよさに自分で気付くことが難しいからである。よって、自分のよさに気付くこと、よさを伸ばし、それをどう生かしていくかを考えさせていく。この態度は、将来にわたって自己実現を果たせるようにするための大切な力であると考えられる。

(イ) 児童の実態（児童観）

この時期の児童は、客観的に自分を見つめられるようになり、自分の特徴に気付いてきている。それは、他と比べて特に目立つところに気付くことであり、長所も短所も含まれる。中学年では、短所を努力によって望ましい方向へ改めることも大切であるが、まずは自分の長所に気付き、自分の個性を伸ばしていこうとする態度を育てたい。自分のよさに自分で気付くことが難しい段階であるが、友達、教師、保護者のふとした何気ない言葉が響き、よさに気付いていくことがある。

本学級においては、特に体育科や道徳科において、意図的にチームでの活動を取り入れ、友達のよさを互いに伝えることを大切にしている。

(ウ) 教材について（教材観）

「いいところなんてひとつもない。」と考える主人公の「しょう」。ある日の体育の時間のソフトボール投げのとき、友達にかけてもらった「いいかたしてるね。」という言葉によって自分のよさに気付く。その言葉は、しょうにとっておまじないの言葉となった。このおまじないの言葉が野球チームに入るきっかけとなり、厳しい練習にも耐え、自信をもつこととなり、自分が苦手だと思っていたことができるようになる。そして、大きな夢を描くようになった。この姿を通して、児童が自分の特徴に気付き、そのよさを伸ばしていこうとすることで、自尊感情や自己肯定感を高めることができる教材である。

エ 自尊感情や自己肯定感を高めるための視点

特に重点にする観点		
<input type="checkbox"/> A 自己評価・自己受容	<input type="checkbox"/> B 関係の中での自己	<input checked="" type="checkbox"/> C 自己主張・自己決定
指導上の留意点		
<p>児童が自分のよいところに気付くことが、自尊感情や自己肯定感を高めることに関連していると思われる。そのため、児童が自分のよさを認識できるよう、担任が児童の特性に合わせ、よいところを伝えられる準備をすることが必要になる。学校の実態によって、専科教員や少人数指導担当の教員等、複数の教員に児童の特性に合わせたよいところを聞き取りしておいたり、T2として実際に授業に入り、直接児童に伝えたりすることで、説得力のある支援ができるようにする。</p> <p>また、学級活動などで「友達のよいところみつけ」などに取り組んでいる場合は、その取組を活用する。</p> <p>このような指導を通して、自分の長所や繰り返し努力してできるようになったことに気付くようにする。</p>		

オ 着目した児童の自尊感情の傾向及び指導の方向性

<p>A 自己評価・自己受容 4.00 3.00 2.00 1.00</p> <p>C 自己主張・自己決定 B 関係の中での自己</p> <p>全観点が低い場合</p> <p>※学級全体の傾向と比較した場合全観点が低かった。</p>	<p>【傾向】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の短所が気になり、他者と比較して自己を評価する傾向が強い。 ・自分に自信がないため、自己を否定的に見る傾向が強い。 ・周りの人への感謝の気持ちをもったり、人のために力を尽くそうとしたりする気持ちが弱い。 <p>【指導の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のよさや個性を認識する場面や経験を増やし、ありのままの自分を受け入れられるようにする。 ・自己評価が高まるように具体的な場面を捉えて褒める。 ・人との関わりの中で自分があることに気付かせる場面を設定する。 ・体験的な活動を通して、集団のために活動する喜びを体験させる。
--	---

カ 本時の指導

	学習活動 (◎主発問 ○補助発問)	○指導上の留意点 ☆評価 ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点 □着目した児童の指導の方向性
導入 5分	<p>(1) 自分のよいところを考える。</p> <p>(2) 考えたことを発表する。</p> <p>(3) 本時の主題名を知る。</p>	<p>○自分のよいところを落ち着いた気持ちで考えるよう伝える。</p> <p>○発表は、すすんで挙手した児童を指名する。挙手する児童がいない場合は、無理に指名せず、本時のねらいを伝える。</p>

<p>展開 37分</p>	<p>(4) 教材「うれしく思えた日から」を読んで、しょうの気持ちを話し合う。</p> <p>○（いいところなんてひとつもない。）と思っていたとき、どんな気持ちでしょう。</p> <p>【予想される反応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ あーあ、ぼくはだめだな。 ・ 引き立て役の野菜たちに似ているな。 <p>○「しょうくん、すごいなあ。いいかたしてるね。」と言われたとき、どんな気持ちになったでしょう。</p> <p>【予想される反応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 僕が褒められるなんて、信じられない。 ・ うれしい。 ・ ぼくにもいいところがあったんだ。 <p>◎しょうは、どんな考えからいろいろなことができるようになったのでしょうか。</p> <p>【予想される反応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いいところを生かせるようになった。 ・ 自分には他にもいいところがあるかもしれない。 ・ あきらめないで頑張ってみようかな。 <p>(5) 改めて自分のよいところを考え、更にもどのように伸ばしたいかを考える。</p>	<p>○しょうの気持ちを考えることを伝える。</p> <p>■自己肯定感が低くなっているしょうの気持ちを考える。</p> <p>■友達に認められたことで、自分のよさに気づき、しょうの気持ちが変わったことを捉える。</p> <p>■よさを伸ばし、増やしていったことで、前向きに自信をもてるようになったように共感できるようにする。</p> <p>☆よさを伸ばし、増やしていったしょうの気持ちを考えている。〔観察、発言〕 （*「座席表シートCタイプ」の活用）</p> <p>■「自分のよいところをのぼそう」（『心しなやかに』）に記述する。</p> <p>○導入で考えたよいところと変えてもよいことを伝える。</p> <p>○教材を参考に、どうしたらよいところを伸ばしたり、増やしたりできるかを示す。</p> <p>・ 一つのことを続ける。</p> <p>・ 認められた経験を励みにする。</p> <p>・ 好きなことややりたいことをしながら、他のことにも挑戦する。</p> <p>○担任が専科教員などから児童のよいところを聞き取り、自分でよいところを考えられない児童に対して伝える。</p> <p>■自分の長所や繰り返し努力してできるようになったことに気付くようにする。</p> <p>☆自分のよいところを考え、伸ばそうとしている。〔観察、記述〕 （*「座席表シートCタイプ」の活用）</p>
-------------------	---	---

<p>展開 37分</p>		<p>【着目した児童】</p> <p>□自分のよさや個性を認識する場面や経験を増やす。</p> <p>○専科教員などから、本人の個性に関するよさを聞き取り、伝える。</p>
<p>終末 3分</p>	<p>(6) 教師の説話を聞く。</p>	<p>■よいところに気付き、伸ばしていった教師の経験などを話し、児童が前向きな気持ちになることができるようにする。</p>

*東京都教職員研修センター『特別の教科 道徳 指導読本Ⅱ

道徳科 指導と評価のガイドブック』（平成30年3月）P58

キ 成果

(7) 全体の様子

本時の授業では、授業者は一人一人の児童の言動や特性を丁寧に捉えて、意識的に褒めたり認めたりしながら指導した。例えば、「よいところがない人って、いるのでしょうか。」と児童に聞くと、「（そのような人は）いない。」「それぞれ個性がある。」など、児童から発言を引き出し、うなずきながら認めていた。また、児童が改めて自分のよいところを考え、更にどのように伸ばしたいかを考えた際、「これが、ぼくの自慢かなあ。」という児童のつぶやきに、「すごい。自慢できるなんて。」と、児童のよさを認め、学級に伝わるようにしていた。さらに、発言が苦手な児童が友達の発言にうなずく仕草を見逃さずに、「うなずいていますね。」と児童の共感した行動を認め、学級全体に伝えていた。

また、授業者は一人の児童の発言を学級全体に「みなさんはどう思いますか。」などと常に問い返しながらつなげて発展させ、児童一人一人が学級の中で自己の存在に有用感をもつようにしたことで、児童の自尊感情や自己肯定感を高めていた。そうした授業者の姿が波及し、児童の発言に他の児童が自発的に共感する姿も見られた。

(4) 着目した児童の様子

自分のよいところを考える場面で、以前に他の学習で友達から書いてもらった学習シートを活用して、「やさしさをもっと伸ばしたい。」など、自分のよいところを再確認しながら、自信をもって伝える姿が見られた。その際、授業者は、机間指導において、着目した児童が考えたことに「いいよ。」と認めたり、自分で決定したことに「確かにそうだよね。」と共感したりしながら、自信をもたせたり、自分の考えを表出しやすい雰囲気をつくったりしていた。

このように、自尊感情や自己肯定感を高めるためには、1時間の学習活動のみならず、日頃から学級経営をはじめ、教育活動全般で有機的に取り組んでいくことが大切である。本学級では、道徳科のみならず、他教科等でも自分や友達のよさを考えたり、気付かせたりする活動を日常的に取り入れており、自尊感情や自己肯定感を高めるための継続的な取組や児童がお互いの意見を出し合い認め合う雰囲気づくりの大切さを再確認できた。

(2) 「指導方法」で高める授業モデル【中学校 数学】

第2学年 数学 ー平行と角ー

ア 単元名 「平行と角」

イ 単元の目標

図形に含まれる角の性質について、実測等の帰納的な方法で確かめるとともに、これらの性質が平行線の性質等をもとにして演繹的に説明できることを理解する。

ウ 単元の評価規準

ア 数学への関心・意欲・態度	イ 数学的な見方・考え方	ウ 数学的な技能	エ 数量や図形などについての知識・理解
① 様々な事象について、平行線の性質、三角形の角についての性質を利用し、証明するなど、数学的に考え表現することに関心をもち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。	① 平行線の性質、三角形についての性質等についての基礎的な知識及び技能を活用しながら、事象を数学的な推論の方法を用いて論理的に考察し表現することができる。 ② 自己の学習の過程を振り返って考えを深めている。	① 平行線の性質、三角形の角についての性質等を、数学の用語や記号を用いて簡潔に表すことができる。 ② 平行線の性質、三角形の角についての性質等を用いて新たな角や多角形の角の数等を求めることができる。	① 平行線の性質、三角形の角についての性質、図形の証明の必要性と意味及びその方法等を理解し、知識を身に付けている。

エ 単元観

中学校第2学年では、「図形の合同について理解し図形についての見方を深めるとともに、図形の性質を三角形の合同条件などを基にして確かめ、論理的に考察し、表現する能力を養う。」ことが求められる。いわゆる、論証の始まりであり、図形の性質等の根拠を明らかにしながら説明していくことになる。

本単元では、これまでに学習した「平面図形の性質や関係を直観的に捉え論理的に考察する力」を活用して、基本的な平面図形の性質を見だし、平行線や角の性質を基にしてそれらを確かめていく。そして、「ペアワーク」などの指導方法を工夫し、生徒同士で認め合い、褒め合う場面等を設定しながら、生徒一人一人の自尊感情や自己肯定感を高めることで推論の過程を的確に表現する力を養うことをねらいとする。

オ 単元の指導計画と評価計画（8時間扱い）

時間	ねらい	学習内容・学習活動	評価規準(評価方法)
第1時	・対頂角の意味を理解し、論理的に筋道を立てて説明することができる。また、同位角、錯角の意味を理解する。	・対頂角、同位角、錯角の関係を理解する。また、対頂角については性質が成り立つ理由を考え、表し、説明する。	アー①(机間指導、ワークシート)
第2時	・平行線と同位角の関係を基本性質として確認し、平行線と錯角の関係を、論理	・平行線と同位角の関係を理解し、それを用いて平行線と錯角の関係について説明する。また、平行線と同位	エー①(ワークシート、テスト)

	的に筋道を立てて説明する。	角、錯角についてまとめた後、逆についても考え、理解する。	
第3時	・三角形の内角の和が 180° であることを、論理的に筋道を立てて説明する。	・直線の角度が 180° と対頂角、平行線の同位角や錯角を使って、三角形の内角の和が 180° になることを説明する。また、外角について理解し、三角形の外角の性質を考える。	イー①（ワークシート、発言）
第4時（本時）	・多角形の内角の和の求め方を、論理的に筋道を立てて説明する。	・三角形の内角の和が 180° であることを用いて、八角形までの内角の和を考え、求め方を説明する。また、 n 角形の内角の和を n を使った文字式で表し、その式の意味を理解する。	ウー①（机間指導、ワークシート） イー②（振り返りシート）
第5時	・ n 角形の外角の和の求め方を、論理的に筋道を立てて説明する。	・多角形の外角の和が 360° になることに気づき、 n 角形の内角の和の求め方を使い論理的に説明する。	エー①（ワークシート）
第6時	・多角形の内角の和と外角の和の性質を使って、角の大きさを求める。	・与えられた図形の内角の大きさや外角の大きさを、既習事項を使って求める。（問題演習）	ウー②（机間指導・ワークシート）
第7時	・角の大きさの求め方を、補助線や根拠となる図形の性質を明らかにして説明する。	・平行な2直線を含んだ角の大きさの求め方について考察し、考え方を共有する。また、問題演習を通して、平行な2直線を作図し、角の大きさを求められることに気付く。	イー①（机間指導、ワークシート）
第8時	・基本的・発展的な問題を通して、これまでの学習を振り返り、知識を定着させ、既習事項を新たな問いに活用する。	・問題演習や発展的な内容を取り入れることで、実態に合った学習活動を行う。	アー①（机間指導、ワークシート）

カ 自尊感情や自己肯定感を高めるための視点

特に重点にする観点		
<input type="checkbox"/> A 自己評価・自己受容	<input checked="" type="checkbox"/> B 関係の中での自己	<input type="checkbox"/> C 自己主張・自己決定
指導上の留意点		
<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に課題に取り組むことができるようにするために、課題解決に必要な基本的な用語や式等、既習事項を振り返る時間を設定する。 ・課題に主体的に向き合えるように、数学を解くことの楽しさを味わえる課題設定となるように工夫する。 ・他者と関わり合い、認め合う場の設定として、ペアワークを取り入れる。その際は、お互いが役割をもてるようにするなど、誰もが自己肯定感等を味わえるように課題設定やペアの組み方等を工夫する。 		

キ 着目した生徒の自尊感情の傾向及び指導の方向性

<p>A 自己評価・自己受容</p> <p>C 自己主張・自己決定 B 関係の中での自己</p> <p>IIタイプ 「B 関係の中での自己」が高い</p>	<p>【傾向】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分よりも他者の気持ちを優先し、思いやりの気持ちが強い。 ・人の視線を気にして、自分の考えを伝えることが難しい。 <p>【指導の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや解答等を明確にしてから、ペアワークに取り組めるようにする。 ・自己表現しやすくするために、ペアの組み方等を工夫する。
--	---

ク 本単元における自尊感情や自己肯定感を高めるための「指導方法」の工夫

本単元では、「指導方法」のうち、特に「ペアワーク」に着目し、生徒一人一人の自尊感情や自己肯定感の傾向や指導の方向性に応じて、問題を解く場面等で以下の三つの手だてを実践した。

<p>【手だて①】 任意の1問を分担して解く。</p> <p>【例】</p> <p>①証明のうち、問題を解く部分を分担して行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒α $\angle EAC = \angle ACB$ ・生徒β $\angle DAB = \angle ABC$ <p>② $\angle DAB + \angle BAC + \angle EAC = 180^\circ$ であることを、ペアで確認する。</p>
<p>【手だて②】 任意の1問をペアで協議しながら解く。</p> <p>【例】</p> <p>①各自で問題に対する考えをもつ。</p> <p>② $\angle EAC = \angle ACB$、$\angle DAB = \angle ABC$ について、ペアで確認する。</p> <p>③ $\angle DAB + \angle BAC + \angle EAC = 180^\circ$ であることを、ペアで確認する。</p>
<p>【手だて③】 任意の1問を各自で解き、ペアで共有する。</p> <p>①各自で解く。</p> <p>②解答や解答に至るまでの方法をペアで話し合う。</p> <p>③双方の考えで分かりやすい部分を抽出し、よりよい考えとなるよう意見を交換する。</p>

ケ 本時の指導（全8時間中の第4時間目）

(7) 本時の目標

多角形の内角の和の求め方を、論理的に筋道を立てて説明することができる。

(1) 本時の指導

	学習活動	<p>○指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法） ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点 □着目した生徒への指導の方向性</p>
導入	<p>(1) 既習事項から本時の課題を見いだす。</p> <p>(2) ねらいを確認し、見通しをもつ。</p>	<p>○前時に証明していることにも触れる。</p>

展 開	ねらい：多角形の内角の和を求められるようになるろう。	
	(3) 問題 1 (五角形及び六角形の内角の和を求める問題)に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ■自己表現しやすくするために、ペアの組み方等を工夫する。 ■つまずきに応じた指導を行い、自分の考えや解答等を明確にしてから、ペアワークに取り組めるようにする。 ○机間指導により、異なる考えを見付ける。ない場合は、別の考えを示す。 ○(4)では、生徒の習熟度等により、ペアワークでの学習活動を取り入れる。 ■解答に至るまでの方法等をペアで話し合い、自分の考えに自信をもてるようにする。 □自分の考えや解答等を明確にしてから、ペア学習に取り組めるようにする。
	(4) 問題 2 (七角形及び八角形までの内角の和を求める問題)に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ☆ウー① (机間指導、ワークシート) ○(5)では、教科書を参考にまとめる。 ○一般化するためには文字で表現することが必要であることを想起できるようにする。 ○多角形の分け方によって式が異なることを示し、別の式等を考えることができるようにする。
終 末	(5) 文字を用いることで多角形の内角の和を求める式を一般化できることについてまとめる。	
	(6) ワークシートの練習問題に取り組む。 (7) 振り返りシートにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ○問題を解く時間を利用して、机間指導により、定着しているかを確認する。 ☆イー② (振り返りシート)

コ 成果

(7) 全体の様子

生徒一人一人の自尊感情の傾向に応じて「指導方法」を工夫し、「ペアワーク」において生徒の実態に応じて三つの手だてを実践したことで、本時の目標である多角形の内角の和の求め方を、論理的に筋道を立てて説明する姿が多く見られた。

また、教師が机間指導等において、生徒の解答方法等について褒めたり、認めたりしたことで、全体で自信をもって発言する姿が見られた。

(4) 着目した生徒の様子

着目した生徒は、ペアで協議して問題を解くことで、自分の考えを相手に積極的に伝える姿が見られた。また、ペアで分担して問題を解くことで、自分の解答方法等について論理的に筋道を立てて説明する姿が見られた。

さらに、振り返りシート等には、「多角形の外角の和が 360 度になることなどを相手に伝えることができた。」、「三角形や四角形の角の性質を一つ一つ思い出して解くことができた。」、「問題をもう少し早く解けるようになりたい。」等の記述が見られた。

こうした姿や記述から、ペアワークの指導方法を工夫することで、生徒が自分の考えに自信をもち、意欲的に学習に取り組むことができることが分かった。

(3) 「指導方法」で高める授業モデル【高等学校 国語総合】

第1学年 国語総合 一羅生門一

ア 単元名 「羅生門」

イ 単元の目標

- (ア) 登場人物の心情や場面等について理解を深め、表現に即して読み取ることができる。
- (イ) 下人の考え方について、自分と比較して考えることができる。
- (ウ) 語句の意味を理解し、語彙を豊かにすることができる。

ウ 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 知識・理解
① 作品の情景や場面等を考えようとしている。 ② 下人の心情の変化等について、自分なりの考えをもとうとしている。	① 登場人物や場面設定等について、読み取ることができる。 ② 下人の心情の変化等について、読み取ることができる。	① 文中の漢字や語句等について、正しく理解することができる。 ② 作品の特徴的な表現等について理解することができる。

エ 単元観

本単元の教材である「羅生門」は、下人と老婆のやり取りの中で、人の生き方や心情等について考える場面が多くある。

本単元を通して身に付けさせたい力は、主に以下の3点である。第1に、登場人物の心情や場面等について、表現に即して読み取る力である。第2に、下人の考え方について、自分と比較して考える力である。第3に、語句の意味を理解する力である。

本単元を通して、生徒の文章を読む力を高めるとともに、「ペアワーク」や「グループワーク」などの指導方法の工夫を通じて、自分自身の考えや価値観を生徒同士で比較し、認め合いながら、生徒の自尊感情や自己肯定感を高める。

オ 単元の指導計画と評価計画（全8時間）

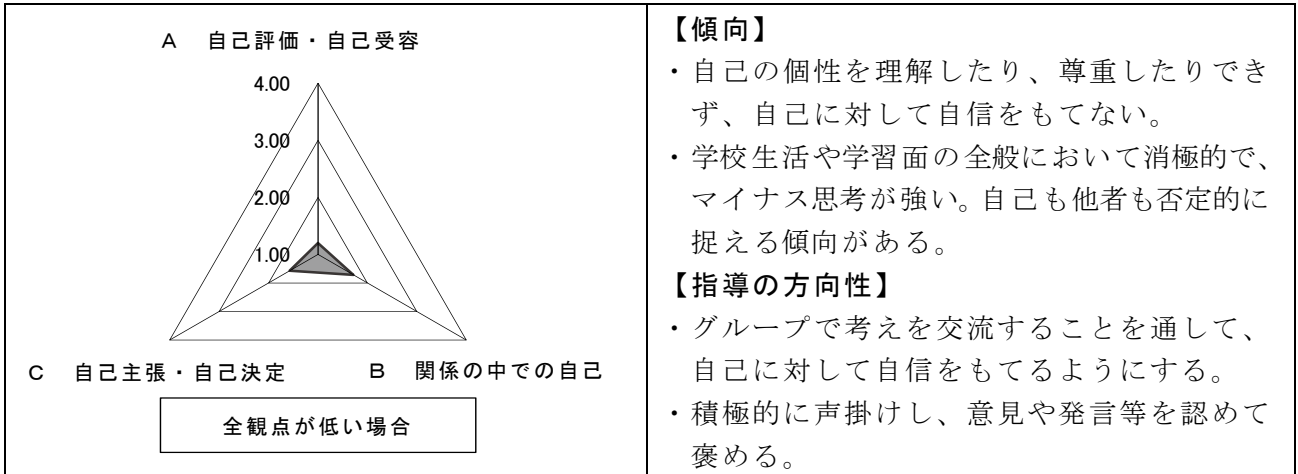
時間	ねらい	学習内容・学習活動	評価規準（評価方法）
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ・作者と作品の時代背景、作品の全体像を理解する。 ・作品内の語彙について理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を使って、作者の生い立ちを確認する。 ・作品中の時代背景について確認する。 ・文章構成を確認する。 ・教科書の注意書きに書いてある語彙について各自で調べ、意味を確認する。 	アー①（観察、ノート） ウー①（観察、ノート）
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ・第一場面の場面設定等について読み取ることができる。 ・下人の人物像について叙述に即して明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一場面の状況について叙述を基に考える。 ・共有する中での気づきをノートにまとめる。 ・下人の人物像を、文章内の叙述を基に考える。 	アー①（観察、ノート） イー①（ノート）

第3時	<ul style="list-style-type: none"> ・第一場面の下人の心情について、叙述に即して明らかにする。 ・作品中の情景描写を表した表現方法が、どのような効果を発揮しているのかを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一場面の下人の心情について叙述を基に考える。 ・「からす」、「きりぎりす」についての情景描写の効果について、自分の考えをまとめる。 	イー②（観察、ノート） ウー②（ノート）
第4時 （本時）	<ul style="list-style-type: none"> ・作品中の情景描写と関連付けて、下人の心情を考察する。 ・下人の心情を考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下人が上がっていく楼の上や、のぞいてみた楼の中の様子が分かる描写を読み取り、情景描写と下人の心情を関連付ける。 ・楼の中をのぞくまでの下人の描写から下人の暗い心情や、高い緊張感を読み取る。 	アー②（観察） イー②（ノート）
第5時	<ul style="list-style-type: none"> ・下人の心情を考察する。 ・心情の変化の原因と根拠を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楼の中をのぞいている下人の心情の推移について読み取る。 ・下人が憎む「悪」とは何かを考える。 	アー②（観察） イー②（ノート）
第6時	<ul style="list-style-type: none"> ・下人の心情を考察する。 ・心情の変化の原因と根拠を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下人が老婆の着物を剥ぎ取るに至るまでの心情の推移を読み取る。 ・老婆の意見について、賛成又は反対の立場から考え、意見文を作成し、下人が「きっと、そうか。」と考えるに至った原因を明らかにする。 	アー②（観察） イー②（ノート）
第7時	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の前半部分では正義に寄っていた下人の心情が、悪に寄っていたことを読み取る。 ・「夜の底」について、自身の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下人の「嘲るような声」とは、何を「嘲った」のかを考える。 ・「夜の底」とは何を意味しているか、ここまでの授業内容を踏まえて書く。 	アー②（ノート） ウー②（ノート）
第8時	<ul style="list-style-type: none"> ・物語を通して、本作品がどのようなことを伝えたいのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を通し、どのようなことを訴えかけられているのか、またそれについてどのように思うかをまとめる。 	アー①（観察）

カ 自尊感情や自己肯定感を高めるための視点

特に重点にする観点		
<input checked="" type="checkbox"/> A 自己評価・自己受容	<input type="checkbox"/> B 関係の中での自己	<input type="checkbox"/> C 自己主張・自己決定
指導上の留意点		
・生徒の活動のねらいを明確にし、生徒一人一人が活動の目標をもって意欲的に取り組めるようにする。		

キ 着目した生徒の自尊感情の傾向及び指導の方向性



ク 本単元における自尊感情や自己肯定感を高めるための「指導方法」の工夫

本単元では、「指導方法」のうち特に「ペアワーク」や「グループワーク」に着目し、生徒一人一人の自尊感情や自己肯定感の傾向や指導の方向性に応じて、登場人物の心情等を考える場面で以下の手だてを実践した。

個人で考える場面	ペアやグループで考える場面
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の意見や考えを聞き、その回答について、認め、褒める。 ・ 発問に対する意見や考えを、他の生徒からも聞く。 ・ 出てきた複数の意見や考えの相違点や共通点について質問し、生徒の着眼点を認め、褒める。 ・ 生徒の意見や考えに対する他の生徒からの意見や考えについても、認め、褒める。 ・ 複数の意見や考えを、自身の意見や考えに付け加えて発言するよう指導する。 ・ ノートやワークシート等の記述を確認し、発表が可能な意見や考えを発言できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループの意見や考えを聞き、その回答について、認め、褒める。 ・ 発問に対する意見や考えを、他のグループからも聞く。 ・ 出てきた意見や考えの相違点や共通点について問い掛け、互いに認め、褒め合える場面を設定する。その際、グループとしての意見や考えが特定の個人のものに偏らないようにすることを確認し、複数の意見や考えを集約するよさについて言及する。 ・ グループの意見や考えを基に他の生徒からの意見や考えについても、認め、褒める。 ・ 複数の意見や考えを、自身の意見や考えに付け加えて発言するよう指導する。

ケ 授業展開（全8時間中の第4時間目）

(7) 本時の目標

- 作品中の情景描写と関連付けて、下人の心情を考察する。
- 下人の心情について、自分の意見を伝え合う。

(4) 本時の指導

	学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ○指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法） ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点 □着目した生徒への指導の方向性
導入	(1) 前時の学習内容を振り返る。	○下人が、まだ見ぬものへの恐怖から高い緊張状態にあったことを確認する。
	ねらい：第二場面で老婆を見付けたときの下人の心情を読み取る。	

<p>展開</p>	<p>(2) 下人が楼の中の様子をのぞいているときの心情の推移について考え、全体で共有する。</p> <p>(3) 下人が憎む「悪」とは何かを個人で考え、ノートや付箋に記入する。</p> <p>(4) ペアワークにより、考えを共有する。</p> <p>(5) ホワイトボードに書き、黒板に貼る。</p> <p>(6) 全体で考えを共有する。</p>	<p>○嗅覚を奪うほどの強い感情が、ここではまだ憎悪ではなく、死骸の中に入らずくまる老婆の姿が「六分の恐怖心と四分の好奇心」につながっていることを読み取ることができるようにする。</p> <p>○老婆が髪を抜くたび恐怖が少しずつ抜け、悪を憎む心へ変化する様子を読み取ることができるようにする。</p> <p>○下人に改めて問題を持ち出したらどちらを選ぶかを基に、下人の中にある「悪に対する反感」や「悪を憎む心」を読み取ることができるようにする。</p> <p>○下人の考えに、その理由に関わらず死人からものを奪うことが悪であるという認識があることと、それが合理的ではない感情的な認識であることを確認する。</p> <p>☆イー②（ノート） ☆アー②（観察）</p> <p>■生徒の意見や考えを認め、褒める。 ■生徒一人一人に応じて、声掛けや発問等を工夫する。</p> <p>□ペアで考えを交流することを通して、自分の考えを受け入れることができるようにする。</p> <p>□積極的に言葉掛けし、意見や発言等を認めて褒める。</p> <p>○具体的な意見や発言等を捉えて褒める。</p>
<p>まとめ</p>	<p>(7) 第二場面で老婆に対していただいた下人の心情について自分の考えを書く。</p>	<p>○他者の考えも参考にして、主に、自分が下人の立場であればどう感じるかを書くことができるようにする。</p>

コ 成果

(7) 全体の様子

生徒一人一人の自尊感情の傾向に応じて「指導方法」を工夫し、「ペアワーク」や「グループワーク」の際に、仲間の意見や考えを聞き、認めたり、褒め合ったりする場面を設定したことで、本時の目標である作品中の情景描写と関連付けて、下人の心情を考察し、自分の意見を伝え合う姿が多く見られた。また、ワークシート等には、「羅生門の暗い雰囲気等について、積極的にグループで交流できた。」、「下人の心情等について、グループでの話し合いを通じて考えが深まった。」、「意見を出し合うことで別の考え方を共有することができた。」、「自分だけの意見ではなく、他者の意見も聞くことができ、楽しかった。」等の話し合うことのよさについて触れた記述等が見られた。

(4) 着目した生徒の様子

着目した生徒は、ペアやグループの仲間と協議することで自信を深め、下人の心情の変化について積極的に自分の意見を伝える姿が多く見られた。

また、教師が机間指導等において言葉掛けを工夫し、「いいですね。」、「そう思います。」と生徒の考えや発言を褒めたり、認めたりしたことで、生徒が自信をもって発言する姿が見られた。

(4) 「学習内容」で高める授業モデル【特別支援学校 職業・家庭】

中学部第1学年 一職業・家庭一

ア 単元名 「選挙をやってみよう」（選挙体験学習）

イ 単元の目標

- (ア) 選挙制度や投票方法等について基礎的な知識や技能を習得することができる。
- (イ) 模擬投票等の体験学習を通して、自分の力を発揮しようとしている。
- (ウ) 選挙体験活動を通して、自分の考えをもったり、発表したりしようとしている。

ウ 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
① 意欲的に授業に取り組もうとしている。	① 自分の考えや公約を基に候補者を選んでいる。	① 投票用紙を使って、候補者を選択することができる。	① 選挙制度を理解している。 ② 投票方法や手順を理解している。

エ 単元観

本単元は、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成21年告示、平成27年一部改正）の職業・家庭科の目標である「明るく豊かな職業生活や家庭生活が大切なことに気付くようにするとともに、職業生活及び家庭生活に必要な基礎的な知識と技能の習得を図り、実践的な態度を育てる」ことを目指し、主権者教育として選挙を取り上げる。「18歳選挙権」が平成28年から適用され、18歳から投票が可能になったことを受け、中学部段階から選挙に関する学習を取り扱い、選挙制度や投票方法などについて基礎的な知識や技能を習得させる。また、選挙体験を通して、自他を認める経験を充実させることで、生徒の自尊感情や自己肯定感を高め、自信をもって自分で判断したり決定したりできることをねらいとする。

オ 単元の指導計画と評価計画（全4時間）

時	ねらい	学習内容・学習活動	評価規準（評価方法）
第1時	・選挙制度について基礎的な知識や技能を習得することができる。	・選挙制度について、用語や仕組みなど、基本的な内容を知る。	アー①（観察） エー①（観察）
第2時	・投票方法などについて基礎的な知識や技能を習得することができる。	・投票方法を知り、投票と開票を体験する。	ウー①（投票用紙） エー②（観察、ワークシート）

第3時 (本時)	・候補者として自分の考えをもつことや、公約を基に候補者を選びながら、投票することができる。	・生徒が候補者となり、立候補、投票、開票を体験する。	イー①（発表） ウー①（投票用紙） エー②（観察）
第4時	・選挙体験学習を通して、自分の考えをもつことができる。	・選挙体験学習を通して、分かったことやできたことを振り返る。	アー①（観察） エー①・②（発表）

カ 自尊感情や自己肯定感を高めるための視点

特に重点にする観点		
<input type="checkbox"/> A 自己評価・自己受容	<input type="checkbox"/> B 関係の中での自己	<input checked="" type="checkbox"/> C 自己主張・自己決定
指導上の留意点		
<p>生徒の障害種別や実態は様々である。協調性の高い生徒が多くいる一方、自分の意見を表出できる生徒が少ない。選挙体験学習を通して、周りの友達の意見に流されず、自分にとって何が大事であるかを考え、自分の意見を表出できるようにすることをねらう。本単元を通して、将来の投票につなげたい。</p>		

キ 着目した生徒の自尊感情の傾向及び指導の方向性

<p style="text-align: center;">A 自己評価・自己受容</p> <p style="text-align: center;">C 自己主張・自己決定 B 関係の中での自己</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>VIタイプ 「C 自己主張・自己決定」が低い</p> </div>	<p>【傾向】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・穏やかで友人関係や周りの人との関係が良好であり、学校適応の点では大きな問題はない。 ・集団での活動に協力的な傾向がみられる。 ・自分の判断・行動に不安がある。 ・周囲の評価を気にする。 <p>【指導の方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者との比較ではなく、自分なりの目標の達成を目指すように支援する。 ・自分の判断や自分で決定することに自信をもたせ、好きなことや得意なことを見付けて、取り組めるようにさせる。
---	--

ク 授業展開（全4時間中の第3時間目）

(7) 本時の目標

投票方法や手順について基礎的な知識や技能を習得し、候補者を選び、投票することができる。

(4) 本時の指導

	学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準（評価方法） ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点 □着目した生徒への指導の方向性
導入	《前時の終了後から本時の開始前まで》 ○本時の候補者を知る。	○前時に立候補を募り、本時までポスターを掲示しておく。ポスターには、氏名と公約を掲載する。
	(1) 前時の学習内容を振り返り、本時の学習内容を知る。	■公約を考えたり、演説で友達に説明したりできることを励まし、立候補を促す。 □好きなことや得意なことを見付ける。 ○前時と同様の流れで行うことを伝える。 【前時の学習内容】 ・候補者と公約 ・投票用紙の使い方 ・開票と当選
展開	(2) 候補者とその公約を知る。 候補者は、自分の公約を発表する。 【予想される内容】 ・体力を向上させるために、保健・体育の授業を増やします。 ・夕方にお腹が減るので、給食の量を増やします。 ・みんなとの仲を深めたいので、昼休みの時間を増やします。	○候補者と公約はポスターを用いて生徒に知らせるが、候補者で演説ができる場合には、してもよいことを伝える。生徒の実態によって、教員が代わりに発言することなどもよいことを伝える。 ○公約の内容は、学校生活に関することにする。 ○実現する公約ではなく、本時の学習の中で自分の考えに近い候補者を選ぶ活動であることを確認する。 ■緊張や不安があるときは、発言できそうなことだけを演説するようにする。 □自分なりの目標の達成を目指すようにする。
	(3) 投票する。 ・どの候補者がよいか考える。 ・投票用紙を使って候補者を選択し（シールを貼る）、投票箱に入れる。 ・開票を見る。 【前時に例示している候補者を選ぶ視点】 ・挨拶の声が元気だから。 ・候補者にふさわしい身だしなみだから。 ・公約の説明が分かりやすいから。 ※他にどんな視点があるのかも考える。	■友達に合わせるのではなく、自分がよいと思う候補者や公約を選ぶようにする。 ○投票用紙の使い方（シールの貼り方）を確認する。 ☆ウー①（投票用紙） ☆エー②（観察）

展開	(4) 開票結果を知る。	<input type="radio"/> 当選・落選は、勝ち負けではないことを伝える。 <input checked="" type="checkbox"/> 当選・落選ではなく、得票した（支持者がいる）ことを評価する。 <input type="checkbox"/> 自分なりの目標の達成を目指すようにする。 <input type="checkbox"/> 落選しても、自分を認めてくれた人がいたことを確認する。
まとめ	(5) 本時の学習を振り返り、候補者を選んだ理由（自分で考えたこと）などを発表する。	<input type="radio"/> 発表が難しい生徒については、教員が紹介する。できる限り多くの生徒を取り上げる。 ☆イー①（発表）

ケ 成果

(7) 全体の様子

本時の授業では、プレゼンテーションソフトを積極的に活用し、本時の学習で大切なことを繰り返し提示した。このことによって、生徒は、プレゼンテーションの画面を見ながら、投票方法や手順を予想したり、読み上げたりすることができ、安心して自分の考えを発言できた。また、シールを貼って投票する用紙を用意したことで、様々な障害種別や実態に応じることができ、生徒は安心して学習活動に取り組むことができた。

授業者は、「候補者」や「公約」など、本単元の学習内容を答えられた生徒に対して、「素晴らしい。」「すごい。」など、即時かつ継続的に認めたり、褒めたりしていた。これらの指導の工夫により、生徒は、間違いを恐れず、自信をもって学習活動に取り組むことができた。また、T1のみならず、T2からT5も重ねて生徒の言動を褒めていたことで、生徒の自尊感情や自己肯定感を育む学習環境をつくっていた。

(4) 着目した生徒の様子

着目した生徒は、公約を考えたり、演説したりすることができると思えば、立候補した。生徒は、「当選する、しないは気にせず、演説を頑張る。挨拶をすすんでできる学校にする。」という目標を決め、授業者と相談しながら台本を作成すると、台本を大事にしながら演説の練習をするなど、学習意欲が高まる様子が見られた。本時では、練習の成果を発揮し、いつも以上に明瞭に発表することができ、発表後には満足そうな笑顔が見られた。投票の結果、当選すると声を出して喜び、達成感や成就感を得た様子であった。当選後も、友達から「頑張れ。」と言われると、「嬉しい。」と答え、授業者から「率先して挨拶ができますか。」と問われると、「当たり前です。」と自信をもって答えることができ、自尊感情や自己肯定感の高まりの一端を感じることができた。

本単元では、候補者ポスターを作成して、1週間ほど校内に掲示したことで、候補者の意欲が高まり、他生徒についても学習の見通しをもたせることができた。

第5 研究の成果と今後の取組

1 研究の成果

(1) 大規模調査による児童・生徒の自尊感情の傾向の把握

今年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響等により、当初調査を予定していた時期から変更はあったものの、前回調査と同程度の大規模調査を実施し、現在の児童・生徒の自尊感情の傾向を把握することができた。前回調査と比較して、ほぼ全ての校種・学年において、自尊感情を構成する3観点全ての数値が上昇したことが分かった。

これらの結果は、東京都教職員研修センターが平成20年度から平成24年度に研究した成果とあわせて、各学校がこれまで自尊感情や自己肯定感を高める指導及び授業実践を積み重ねてきたことによる一定の成果であると考えられる。

(2) 先行研究を生かした授業モデルの開発

今年度は、調査と並行して、研究協力校において、自尊感情や自己肯定感を高めるための授業モデルを開発した。開発に当たっては、東京都教職員研修センターが先行研究で明らかにした二つの視点である、「学習内容」で高める視点、「指導方法」で高める視点を活用した。

授業モデルについては、検証授業終了後、その授業で着目した児童・生徒の発言や行動、振り返りシートやワークシートなどを分析・考察した。その結果、各教科等の学習内容を充実させたり、児童・生徒一人一人のよさに応じて指導方法を工夫したりすることで、自尊感情や自己肯定感を高めることにつながることが分かった。

2 今後の取組

第1に、調査結果の分析及び考察である。今年度は、8月から9月にかけて調査を実施した。その集計を10月から11月にかけて行ったが、前回調査との比較のみにとどまっており、数値の変化を分析したり、その要因を考察したりするまでには至らなかった。今後は、授業における指導の工夫や学級経営等に関する教員対象のアンケート調査を行うなど、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感が高まった要因を明らかにする。

第2に、「自尊感情や自己肯定感を高める授業マトリックス一覧表（試案）」の作成である。今年度は、小学校「特別の教科 道徳」、中学校「数学」、高等学校「国語総合」、特別支援学校「職業・家庭」において、自尊感情や自己肯定感を高めるための授業モデルを開発し、検証授業を実施した。

今後、開発した授業モデルについて汎用性のあるものにするとともに、様々な校種や教科等における授業モデルを開発する。そして、開発した授業モデルをまとめた「自尊感情や自己肯定感を高める授業マトリックス一覧表（試案）」を作成し、研究成果の普及・還元を図る。（図11）

各校種	各教科					
	特別活動	特別の教科 道徳	総合的な 学習の時間 職業・家庭	数学	国語	・・・
小学校		うれしく思 えた日から				
中学校				平行と合同		
高等学校					羅生門	
特別支援学校			選挙体験			

図11 「自尊感情や自己肯定感を高める授業マトリックス一覧表（試案）」